

主題「神に与えられた秤」

ルカの福音書 6:37-38

序

本日も共に御言葉に聴いていきましょう。

1. 罪に定めてはならない

イエスの平地の説教から共に学んでいます。前回、前々回は「敵を愛しなさい」という私たちの耳に、心に痛い教えが続いています。しかしこれらは神が愛であるゆえの教え。自分たちを憎み、迫害する敵を祝福し、祈ること。そして私たちの父である神があわれみ深いことから、私たちもあわれみ深くなっていくのだ、と教えられてきました。

本日の箇所は、「さばいてはいけません」、「人を不義に定めてはいけません」「赦しなさい」、「与えなさい」。この4つの教えから成り立っています。これらを通してイエスは何を教えようとしているのでしょうか。それでは、37節の前半をご覧ください。

さばいてはいけません。そうすれば、あなたがたもさばかれません。人を不義に定めてはいけません。そうすれば、あなたがたも不義に定められません。

「さばいてはいけません」。「不義に定めてはいけません」。これだけでも非常にインパクトのあることばです。そして、この二つは似通った意味を持つことばです。ここで「さばく」と使われていることばは、「物事を判断する」、「何かを治める、統治する」といった意味で使われることばです。そして、「不義に定める」は、「罪ありとする」、「罪と定める」といった意味で使われることばです。そしてこの箇所において「さばく」ことは、「物事を悪く判断する」、つまり「罪と定める」という意味で使われています。ですから、ここで言われていることは、自分で他者を罪人だと決めつけて、さばいてはいけない、と言っているわけです。

この「さばく」こと。これは、教会の中でも、私たちの日常でも、度々話題になることがあります。そして、このことばが一人歩きしてしまっている感も否めません。あの人にさばかれたとか、さばいてしまった、と悩んだりしたことが皆さんあるかもしれません。ここでイエスは何に対して「さばいてはいけない」「不義に定めてはいけない」と言っているのでしょうか。新約聖書のヤコブの手紙 4:11 ではこのようにあります。

兄弟たち、互いに悪口を言い合ってははいけません。自分の兄弟について悪口を言ったり、さばいたりする者は、律法について悪口を言い、律法をさばいているの

です。もしあなたが律法をさばくなら、律法を行う者ではなく、さばく者です。

ここでは、兄弟たち、つまり神を信じる者たちの間の中で悪口を言い合ってさばいてはいけない、と言っているわけです。そしてこの箇所の一つ前の10節ではこのようにあります。

主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます。

ここで私たちは、主の御前に出て、へりくだるように言われている。逆を考えるならば、主の御前で傲慢である時、自分こそが正しいと思い込んでいるときに相手の悪口を言い、人をさばくことになる、ということ。もし私たちが、相手の悪口を言い、断罪してしまう時は、相手に対してだけではなく、主の御前で、主に対して傲慢になっているのだと、自戒を込めて覚えておきたいと思います。それでは、相手の間違いを指摘したり、注意したりすることも罪となってしまうのでしょうか。結論から言うと、それは違います。

たとえば教会の中で間違った教えや考えが横行しているのに、「さばいてはいけない」という言葉の一面だけを切り取って、それを根拠に、何も言えず、必要な戒規の執行もされないなら、それは不健全です。それらは教会の健全な成長や兄弟姉妹の信頼関係を築くことを逆に妨げてしまいます。Iコリント 5:12-13 ではパウロはこのように言っています。

外部の人たちをさばくことは、私がすべきことでしょうか。あなたがたがさばくべき者は、内部の人たちではありませんか。外部の人たちは神がおさばきになります。「あなたがたの中からその悪い者を除き去りなさい。」

教会内での問題に対して、パウロはむしろさばきなさい、対処しなさい、と語っています。つまり、ここでは教会で起こる様々な問題を放置したり、見て見ぬふりをするのではなくて、神の教会としての聖さを保つためにも、神のことばに従って適切に判断してさばく必要性を語っています。その中には、戒規も含まれます。教会が神の教会として立つために、痛みながらも時にはたましいの回復を願いつつも、「その悪い者を除き去」ることも必要であるわけです。しかしながら、私たちは神の正義ではなく、自分の正義を振りかざし、主観で断罪してしまう弱さも持ち合わせていますから、自分自身をよくよく吟味しなければなりません。その上で正しい順番で、共に教会を建て上げて行くことが求められているわけです。また、これはまだキリストを信じていない人にも同様にです。人の粗を探し、先走ってさばき、罪に定めるのではなく、まずその人のために、祝福を願い、祈る者でありたいのです。Iコリント 4:5 にあるとおりです。

ですから、主が来られるまでは、何についても先走ってさばいてはいけません。主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。

主がもう一度来られる時、主は、さばくべきことをきちんとさばいてくださる。主は闇に隠れたことも明るみに出してくださる。心の中のはかりごととも明らかにされる。だからこそ、私たちは、先走ってはならない。先走って自分の思いや感情で人をさばくのではなく、そこは私たちの主にお任せする。そのように生きていくときに、神から私たちに称賛が与えられるのです。私の正義ではなく、主の前にへりくだり、先走ることなく、間違ふことのない主のさばきに信頼し、不義に定めぬ生き方を選び取っていきたいのです。続けてイエスは語られます。37節後半から38節。

2. 赦し、与えなさい

赦しなさい。そうすれば、あなたがたも赦されます。与えなさい。そうすれば、あなたがたも与えられます。詰め込んだり、揺すって入れたり、盛り上げたりして、気前良く量って懐に入れてもらえます。あなたがたが量るその秤で、あなたがたも量り返してもらえらるからです。」

ここでの「赦す」こと。元々このことばは「解放する」ということばから派生していて、そこから「離れる」「離縁する」「帰らせる」「赦す」という意味のことばになっています。そしてこの箇所では「赦す」という意味で使われています。私たちは誰かに対して怒りや憎しみを抱いているとき、いつの間にか自分がその感情に支配され、不自由になっていると思うんです。でも赦すことによって自分がそこから解放される。自分の手で赦せない気持ちを握っている限りは、私はその思いと一緒に生きていかなければいけません。でも、その手の中に握っているその思いを手放すときに、その手がひらかれて憎しみは自分から離れていく。そのひらかれた手のひらで、イエスの愛を受け取ることができる。そして、このイエスの愛、イエスの赦しが与えてくれるもの、それは罪からの解放です。私たちは、この恵みの中に生かされていることを覚え続けたいと思います。

そして続けて「与えなさい」と言われる。非常にシンプルな一言です。しかし、ここには、与える対象も方法も相手も何も語られていないのです。ですから、与えると言っても何をしたらいいのだろうか、とってしまう。しかし、主イエスのいのちが与えられた私たちだからこそ、人からの評価や見返りは関係なしに、与え続ける生き方に召されているのです。自己満足のための「与える」ではなく、地域、職場、家庭、教会、その他で関わりが与えられている人たちの必要をよく見つめながら、自分に委ねられているものを惜しむことなく与えられる人にしていただきたいと思わされます。そして、そのように生きる時、神からの

報いが幾重にもあることも覚えておきたいのです。

結論 神に与えられた秤

今日ともに見てきた「さばいてはいけません」「人を不義に定めてはいけません」「赦しなさい」「与えなさい」というイエスの教え。さばかず、不義と定めず、赦し、与えるその存在とは誰でしょうか。それは人ではなく神です。ですから、これらのことは、神の国において、天において、私たちに与えられるものを語っているのです。すなわち、「さばかれない」とは、キリストを信じるゆえに、私たちは罪人としてさばかれない。「不義に定められない」とは、キリストを信じるゆえに、罪なしと不義に定められる。「赦されます」とは、キリストを信じるゆえに、罪が赦される。「与えられます」とは、キリストを信じるゆえに、永遠のいのちが与えられる。このことを言っているのです。だから私たちは神の子とされる希望を抱き、神にさばかれず、不義と定められず、赦され、永遠のいのちが与えられる。38節の後半にこうあります。

詰め込んだり、揺すって入れたり、盛り上げたりして、気前良く量って懐に入れてもらえます。あなたがたが量るその秤で、あなたがたも量り返してもらえるからです。

秤で量る時、升(ます)に穀物を入れる。そのときと同じように、神は与えてくださる。しかし、その入れ方が普通ではないのです。できる限り詰め込み、間がなくなるように揺すって隙間に入れ込み、さらにはすでにいっぱいのところを盛り上げて山盛りにしてくれる。そしてそれを私たちの懐に入れて私たちのものとしてくださる。この神に与えられた「生き方」という秤によって私たちは量っていただけるのです。

しかし、ここで気をつけなくてはならないことは、イエスがなぜ「そうすれば」と言っているのか、ということです。ともすれば「そうすれば」と聞くと、「～しなければ」「～ならない」と思ってしまう。これらが完全にできなければ、という理解に立つのであれば、行いによる救いをイエスが教えているように見えてしまいます。しかし、聖書全体を見ていくとき、そうではないことは明白です。人をさばき、不義に定め、赦せず、与えるのではなく惜しんでしまう私がいる。そんな私を見て、イエスは「あなたはこれもあれも出来てないね」、と減点法で見るようなことはしません。私のもとに来なさい、と招いてくださる。十字架の上で私のために負ってくださった、その傷を見せて、どれほどの愛で愛しているのか教えてください。さばかれるはずの者がさばかれず、不義に定められるはずの者が義と認められ、赦されないはずのない者が赦され、与えられる資格のない者が与えられることを知る。この恵みを知った時、この福音を信じた者は、さばかない、不義に定めない、赦し、与える生き方へとキリストにあって変えられていくのです。ですから、キリストを知る私たちは、私た

ちの罪のリアルを見続けなくてはならない。こんなに愛されてるのに、それなのにまだ自我にしがみつこうとする、かっこ悪い醜い私のこの罪の現実打ちひしがれなくてはならないのです。

その現実から目を逸らさず、真摯に向き合うとき、キリストの十字架が私のためのものだと迫ってくる。そして、キリストの愛に生きる使命を見出していけるのだと思うのです。最後にヨハネの福音書 3:16-21 節を開いて閉じたいと思います。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれない。信じない者はすでにさばかれています。神のひとり子の名を信じなかったからである。そのさばきとは、光が世に來ているのに、自分の行いが悪いために、人々が光よりも闇を愛したことである。悪を行う者はみな、光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光の方に来ない。しかし、真理を行う者は、その行いが神にあってなされたことが明らかになるように、光の方に来る。